

▼オピニオン

先進地域の今・そして未来（中編）

NPO法人 州都広島を実現する会 事務局長
シビルNPO 連携プラットフォーム 理事
野村 吉春



■前編から中編へ

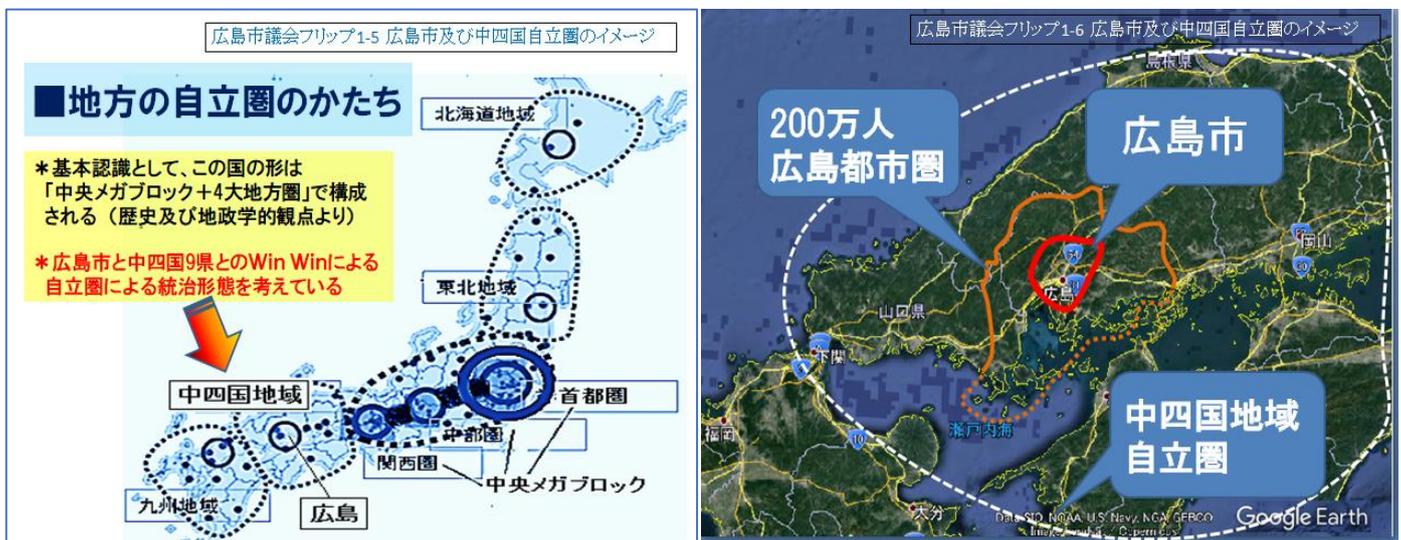
私が過疎地の報告をする意味は何か？ それは、東京圏のように「政治・経済・文化・教育・情報・・・」の全てが揃って、何の不自由もない処にお住いの方にも、地方への関心を持って頂きたいと願うからです。小さなニッポンで東京と地方は一枚のコインの裏表に過ぎません。CNCP 通信の読者である土木人には、「この国のかたち」を高所から眺める、そんな俯瞰的な目線を磨いていただきたい。

そこで、今回は「後編」として「過疎地の未来」を描く予定でしたが、「中編」として「この国のかたち」を構造的に捉えて頂き、その上でこの1～2年間に過疎地に生まれている「新たな事業」をいくつか紹介し、最終回の「後編」で更なる「未来への展望」を描きます。

■この国のかたち

普通に地方圏というと、東京圏（南関東1都3県）以外のエリアと言えますが、大阪圏や名古屋圏をも大都市圏として捉えると、その残りは北海道、東北、中四国、九州といった4ブロックが主な地方圏となります。その中枢に「札・仙・広・福」と呼ばれる政令市（通称100万人都市）が存在し、そこには国の地方局や企業の支社・支店が立地しています。

読者には、「そんなこと言われなくても解っているよ！」と叱られそうですが、この骨格をまずは押さえておいて欲しいのです。下の図は、広島市議会で地方政策を論じるために私のNPOが提供している図ですが、参考イメージとしてご覧ください。



■地方圏の構造的な理解へ

その地方圏ですが、まずもって一枚岩で語ることはできません。幾つかの階層に分類されます。「そんな話を何処から仕入れているのか？」と疑問に思われるかもしれませんが、私はコンサル時代に日本全国を「どさ周り」して御用聞きをやってきた人間です。

それと、今でも広島を拠点に近場の中国四国地域や九州辺りの辺境の地に、仕事や遊びで度々出かけており、他方で東京にも年に20回くらい上京しているので、「地域を相対化する観察眼」がおのずと身につくのです。職業柄というより、まあ好きなんです。

以上の知見をもとに、野村のオリジナルの地方圏の構造を、次ページに紹介しておきます。

←	対象エリア←	人口規模←	地域の現状←
Ⓐ	旧町村 ← (合併で市町に含まれるケースあり)←	1000 人程度←	<ul style="list-style-type: none"> ・いまや消滅目前の地域。人口減は 1/5~1/8 の激減地域で、中山間地域や島嶼部など。← ・およそ高齢化率 50%以上。「日本の未来が既に到来している」と言って良い地域。←
Ⓑ	小都市 ← (合併で他市に合流のケース多い)←	5 万人未満←	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の、消滅自治体の代表地域。← ・未だ市政を敷いていても、人口が 30~50%減少、商店が消え、もはや「都市」ではない。←
Ⓒ	中都市 ←	5~19 万人←	<ul style="list-style-type: none"> ・このクラスの都市経営が一番苦しい。← ・一部の勝ち組を除いて、商店街はシャッター通り化し、往時の賑わいは消えてさびしい。←
Ⓓ	中核市 ←	20~50 万人←	<ul style="list-style-type: none"> ・多くの県庁所在地がこのクラスに属する。中核市は全国で 60 市、何れも人口減に悩む。←
Ⓔ	地方中枢都市 ← (政令指定都市)←	70~200 万人←	<ul style="list-style-type: none"> ・地方圏では数少ない人口増加都市。← ・特に「札・仙・広・福」には、最強の都市政策の推進によって、地方圏からの人口流出を食い止める、「ダム効果」の機能が重視される。←

■何故に過疎地を描くのか

広島市は表のⒺ、私の住んでいる安佐南区は、半世紀前には人口4万人で今や 25 万人。市内 8 区の中で最大の人口集積地。大学が 5 校、山陽自動車道（広島 IC）、JR 可部線、アストラムライン、大型商業施設が多数立地し、私を含めて住民の 8 割は外部からの移住者で、人口増加率や若者の割合といった指標を見ると、地方圏にあって東京圏に劣らない発展地域なのです。

他方で、前回紹介した過疎地（表のⒶ）では人口が 8 割減という具合ですから、地方圏として一括りに出来ない状況がお解りいただけるでしょう。表の中間に位置するⒷⒸⒹも問題を抱えていますが、このシリーズでは東京圏の真逆に対比されるべき「過疎地」を取り上げます。

■新しい今が始まっている

この地方の研究者によれば、「過疎は終わった！」と宣言しています。つまり、高齢化率 50%を超える地域では、流出する若者がゼロになった今、もう底を打ったのです。既に都会からの I ターンや U ターンの僅かな流入による「人口の社会増」が始まっています。こうした状況に加えて、都会との「二地域居住」や「関係人口」という繋がりも広がりつつあります。

そんな中で、ここでは誰もが知っている「定番メニュー」とは少し異なる動き 5 例を紹介します。

①グランピングの登場

この「名称」はご存じでしょうか？ コロナ禍を契機とする「ワーケーション」に対応した宿泊施設の改装や、リゾートハウスが開店していますが、「グランピング」という自然界での「キャンプ生活+快適空間」の両面に対応した新たなスタイルが、この 1 年で瀬戸内海や中国山地に 5 か所も誕生しました。

②サイクリングの高まり

近年は健康志向のもと、「しまなみ海道」（西瀬戸自動車道尾道・今治ルート）に併設された自転車道は「サイクリングの聖地」としての不動の地位を確立しています。その他にも、広島県の蒲刈列島（7 島）をつなぐ「とびしま海道」も人気を高め、最近ではコロナ禍での自転車通勤という追い風もあるようです。

③まめな食堂がオープン

「何だ、この名前は？」と覗きたくなる食堂です。島のレモン農園の中にある元・医療機関をリニューアル。写真を見れば、お解りのようにこれはタダの食堂ではありません。HP の解説文には「東京が中心、都市が中心、人間が中心、男性が中心・・・と当たり前の『中心』を一体誰が決めたのだろう。



リゾートハウス（建設中）
 グランピング内部
 グランピングサイト
 ワーケーション



